

阿波踊りにみられる企業連の多様な参与実態とそれを支える要因

—三原やっさ踊りとの比較を通じて—

中村 まい (お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科)

Diverse Realities of the Situations of Corporate Groups Participating in the Awa Odori and Factors Enabling Them:

A Comparison with the Mihara Yassa Odori

Mai NAKAMURA (Ochanomizu University Graduate School of Humanities and Sciences)

Abstract

The Awa Odori, nowadays spread throughout Japan, is a Bon Dance which originated in Tokushima City. The Awa Odori festival in Tokushima City has recently experienced an element of confusion over its operation, and it is definitely necessary now to grasp the current situation of its bearers in order to ensure its stable operation.

The purpose of this study is to clarify the details of the actual activities of the corporate groups participating in the Awa Odori and to show their characteristics by comparing them with the corporate teams participating in the Mihara Yassa Odori. Questionnaire surveys were conducted to examine the overall trend of corporate groups/teams in terms of the composition of their participants, the amount of practice, and their consciousness toward practice, and then supplementary interviews were conducted for individual cases. Responses were obtained from 54 corporate groups of the Awa Odori (with a response rate of 69.2%) and 14 corporate teams of the Mihara Yassa Odori (with a response rate of 59.1%).

The results revealed that the corporate groups participating in the Awa Odori were characterized by a wide range of participants, both within and from outside of the company and the region, and by diversity in the degree of commitment to practice and the attitude toward seeking participation in practice. Factors that make such diverse participation possible include the characteristics of the dance as a processional-type of dance that enables a wide range of formations, the existence of fee-based performance sites and the collaborative relationship derived from the folk performing arts themselves. The fact that the corporate groups participating in the Awa Odori allow for the participation of a diverse range of participants, regardless of regions or levels of proficiencies, suggests that they are contributing to the development of the festival as bearers.

Keywords: Folk Performing Arts, Awa Odori, Mihara Yassa Odori, Company, Corporate Groups/Teams

1. 背景と目的

江戸時代から踊り継がれる阿波踊り^{注1)}は徳島市発祥の盆踊りである。昭和初期に徳島商工会議所が観光イベント化を図り、地域経済振興の成功例としてよさこい祭りなどの参考にされてきた。高価な舞台装置や

技能を必要としないため、手軽な客寄せイベントとして全国各地に広まっている^{注2)}。

近年、徳島市の阿波おどりでは運営を巡る混乱が続いている。赤字改善のために運営母体が刷新された2018年^{注3)}以降、安定的な運営を模索している最中である^{注4)}。

観光イベントとしての収益改善のみに傾倒すると、担い手の意図や意思が議論の俎上からこぼれ落ちる危険性がある。俵木（2018：274）は日本の文化財保護の特徴として、「国民」という不特定多数の権利が特定の担い手の権利より優先される傾向があると指摘している。地域経済振興という大多数の利益のために運用されることで、担い手より芸能を享受する者（この場合は観光客）の意思が尊重される可能性がある。

阿波踊りだけではなく、あらゆる民俗芸能は観光資源化という社会的文脈の中で経済的価値にからめとられていく危険性を常にはらんでいる。1992年に制定されたおまつり法^{注5)}は民俗芸能の観光資源化を正当化し、文化財指定制度が観光資源としての価値を保証する役割を担った^{注6)}。2018年の文化財保護法改正によって保存から活用重視へとシフトする中、今後も民俗芸能の観光資源化が盛んに行われるはずである。

観光化の中での祭り運営には、観光客と地域住民双方への配慮のバランスという難しさが付随する。岐阜県の郡上おどりでは観光化の結果、「地元の踊り離れ」が進んだと指摘されている（足立 2015）。観光客だけではなく、地域住民がどのように芸能に関わっているのかを加味することが肝要であろう。しかし、阿波踊りでは市民による踊りの継承やその活動自体が市民に与える影響については十分に明らかにされておらず（阿波おどり事業運営体制等検討委員会 2021：2）、担い手の実態を把握できていない現状がある。

阿波踊りにはさまざまな担い手が存在する。卓越した踊りで観客を喜ばせる有名連^{注7)}や県内外の一般連、大学生らの学生連などが存在しているが、本研究では企業の従業員を母体とする企業連に着目する。その理由の一つに、企業連の活動実態—すなわち、参加者構成や練習内容、参加までのプロセスなど—に着目した研究が少ないことが挙げられる。企業連は徳島市の阿波おどりに参加する連全体の約3割を占めているが、通年で活動している有名連や一般連と比べると活動期間が限られている。そのため、踊りに従事するというより企業PRが主目的である（高橋 2015）とみなされ、研究の文脈では踊りの「担い手」という認識が希薄だったのかもしれない。

そこで、本研究では阿波踊りの企業連の活動実態を明らかにし、対象を定めた比較を通してその特徴を示すことを目的とする。比較対象は、阿波踊りと「振り、演出、伴奏がそっくり」（日本放送協会 1973：336）と言われており、参加チーム全体の約3割を企業が占める三原やっさ踊りに定める。まずは両踊りにおける企業の活動実態を明らかにし、その比較を通して阿波踊りの企業連の特徴を提示する。調査結果から、両踊りの傾向として練習量と参加意識の違いが確認され、その背景に阿波踊りの演舞構成^{注8)}と祭りの開催形態による影響が浮かび上がってきた（詳細は後述）。企業連の活動実態と舞踊特性・開催形態との関係性が明らかになることによって、今後の阿波おどり運営において企業連という担い手を排除せず、良好な関係をさらに発展させる変革が可能になると期待される。

2. 先行研究と研究方法

阿波踊りの連の活動実態に関する先行研究には、「連」の社会構成や活動実態に着目して有名連と学生連の事例を報告した高橋（2000）や、学生連に質問紙調査を行った川内（2017）などがある。これらの先行研究では活動実態の詳細が報告されているものの、対象が少ないため全体的な傾向を見ることはできない^{注9)}。

企業連を対象に参加者への意識調査を行った中村まい（2019）は、企業連の目的が企業PRだけではなく、地域貢献や社員の福利厚生など多様であることを明らかにした。しかし、対象とした6社の企業連参加者の傾向は把握できるが、連ごとの個別の事情、特に練習量や参加者の実態の違いなどは示されていない。筆者

はこれまでのフィールドワークを通して、企業連の参加者が従業員とその家族、友人、企業の顧客など多岐に渡ること、練習内容や練習量も様々であることを目にしてきている。そこで、本研究では幅広く行う質問紙調査と個別の聞き取り調査を併用することにした。

阿波踊りの企業連に関する調査は、2018年徳島市の阿波おどりに参加した全338連の中から78社^{注10)}の企業を対象とする。質問紙調査^{注11)}は2019年9～10月に回収された54社(回収率69.2%)からの回答、電話による聞き取り調査は2019年9月に得られた35社の回答を使用する。

三原やっさ踊りの企業チームに関する調査は、2019年三原やっさ祭りに参加した全79チームから22社の企業を対象とする。質問紙調査^{注12)}は2021年11月に得た14社(回収率59.1%)からの回答、電話による聞き取り調査は2021年11月に得た12社の回答を使用する。

論の進め方として、まず、両踊りの舞踊特性と祭りの開催形態について整理する(3-1)。次に、質問紙調査の結果から企業の活動実態を比較すると(3-2)、阿波踊りの企業連に見られる練習量と参加意識の関係が一樣ではないことが確認されるため、聞き取り調査の結果より具体的な事例を挙げて活動実態を見ていく(3-3)。最終的に企業連の多様な活動実態を舞踊特性と開催形態との関係性から整理し(3-4)、その特徴を提示する。

3. 結果と考察

3-1. 阿波踊り・三原やっさ踊りの舞踊特性と祭りの開催形態

両踊りの舞踊特性と開催形態については表1の通りである。どちらもハイヤ節系統の盆踊りであり、商業都市の経済振興を目的とした祭りで行われてきたため共通点が多い。ともに長く踊られてきた歴史を持ち、2拍動を基本とする行列行進型の踊りで、観光客など当日参加の希望者が参加できる仕組みを持っている。

一方でいくつかの相違点を確認される。阿波踊りには演舞構成があるが、三原やっさ踊りでは発展型の

表1 阿波踊り・三原やっさ踊りの舞踊特性と祭りの開催形態

		阿波踊り	三原やっさ踊り	
舞 踊 特 性	踊りの系譜	風流系芸能の盆踊り	風流系芸能の念仏踊り	
	起源	起源は不明。江戸時代(17世紀)には踊られていた記録がある。	起源は不明。1567年、小早川隆景の築城祝いに踊られたと言われている。	
	音楽	系統	ハイヤ節系統の民謡	ハイヤ節系統の民謡
		楽器	三味線、鉦、篠笛、大太鼓、締め太鼓など	三味線、締め太鼓、平太鼓、篠笛、鉦など
	踊り	踊りの形態	行列行進型	行列行進型
		基本動作	2拍動作	2拍動作
		重心移動のタイミング	2拍目	1拍目
		踊りの種類	男踊り、女踊り、奴踊りなど	男女や年齢で踊り方に違いはない
	踊りの応用	身体の向きや進行方向の変化、隊列・リズムパターンの変形などの組み合わせ	個人ごとの自由踊り	
	衣装	連ごとの揃いの浴衣や法被	チームごとの揃いの浴衣や法被	
開 催 形 態	発展経緯	観光協会による地域振興策	商工会議所が主催する地域の祭り	
	観光客などが参加する仕組み	有(参加者で「にわか連」が組織される)	有(参加したいチームに個人で参加する)	
	有料演舞場の有無	有	無	
	踊り審査と表彰	無	有	
音楽	連ごとに生伴奏の演奏者(鳴り物)が同行する	会場全体で統一音源(舞台上の生演奏)を用いる		

両踊りに関する以下の文献をもとに筆者が聞き取り調査やフィールドワークで得た情報を付加して作成
川内(2007), 三原市教育委員会(2014), 三原やっさ祭り振興協議会「三原やっさ祭り」, 三好(1998), 中村久子(1995;1996), 大森(1992), 関口(2007)

「自由踊り」^{注13)}があるものの、構成上の工夫は見られない。演舞構成は「踊り手の移動範囲・移動方向・移動開始のタイミングを異なるものに予め設定する」（小林 2017：3）もので、動きを揃えるための練習が必要のため、事前の練習量に影響を及ぼすと考えられる。開催形態は各連/チームの参加の仕方に影響を与えると考えられ、両踊りの相違点として有料演舞場と踊り審査の有無、生伴奏の随行が必須かどうかの3点が挙げられる。本研究ではこれらの相違点に着目して考察を進めていく。

3-2. 阿波踊り・三原やっさ踊りにおける企業の活動実態の比較

(1) 参加者構成

阿波踊りに参加している企業連78社を対象とした調査において、回答を得られた54社の参加者数は9人から277人と幅があり、平均は123人である。参加者の構成を複数回答で尋ねたところ、徳島県内の事業所に勤める従業員が主な構成員ではあるものの、54社中12社（22.2%）では県内の従業員が参加していない（表2）。これらの企業では顧客が主な踊り手であったり、県内に事業所をもたない企業が県外から参加していたりする。県内の従業員を主体とする企業でも、県外からの参加者の受け入れや顧客・従業員の家族など企業外からの参加も見られ、参加者の範囲が多岐に渡っていることが分かる。

三原やっさ踊りに参加している企業チーム22社を対象とした調査において、回答を得られた14社の平均参加者数は79人である。参加者構成を見ると、県内の従業員が14社中12社（85.7%）、従業員の家族も10社（71.4%）で確認されるが、県外の従業員や取引先従業員が加わることは少ない（表2）。

(2) 練習への取り組み度合い

阿波踊りの企業連では全く練習しない、もしくは練習は1回のみと回答した企業が12社（22.2%）である一方、練習回数を17回以上確保している企業が10社（18.5%）見られる（表3）。最も練習を行っている企業は47回と回答した。全54社の平均練習回数は8.8回、平均総練習時間は14時間である。有名連では通常週2回、1回2時間の練習が行われ、祭り本番前の7月になると週5回に増える（高橋 2000：35）。通年で活動している学生連では週3回、1回2時間半の練習だと報告されており（川内 2017：23）、踊ることを目的に設立される連と比較すると企業連の練習量は少ないことが分かる。

阿波踊りの演舞構成を実施すると回答した企業は54社中15社（27.8%）で、その平均練習回数は18.2回、平均総練習時間は31.5時間であった。演舞構成を行う企業ほど練習量が多い傾向が確認される。

三原やっさ踊りでは演舞構成のような演出上の工夫は行われておらず、参加者は基本の踊りを中心に会場を縦列で練り踊っていく。企業チームは阿波踊りの企業連ほど練習回数や総練習時間のばらつきがなく、約8割の企業の練習回数は4回以下で、平均総練習時間も2.9時間であった（表3）。

表2 企業連/チームの参加者構成（複数回答可）

		県内 事業所 従業員	県外 事業所 従業員	関連企業 従業員	取引先 従業員 (顧客)	従業員の 家族	その他
阿波 踊り	連数	42	30	33	20	34	19
	比率(%)	77.8	55.6	61.1	37.0	63.0	35.2
三原 やっさ 踊り	チーム数	12	1	6	2	10	4
	比率(%)	85.7	7.1	42.9	14.3	71.4	28.6

企業連/チームの運営に関する質問紙調査（2019, 2021）の結果より

表3 練習回数ごとの連/チーム数と平均総練習時間

		0回	1回	2~4 回	5~7 回	8~16 回	17回 以上	合計
阿波 踊り	連数	1	11	8	12	12	10	54
	平均総練習 時間(時間)	0	0.9	5.3	8.1	17.7	39.5	14
三原 やっさ 踊り	チーム数	2	1	8	2	1	0	14
	平均総練習 時間(時間)	0	0.8	3.1	4.9	8	0	2.9

企業連/チームの運営に関する質問紙調査（2019, 2021）の結果より

(3) 企業連 / チーム担当者の練習参加に対する意識

阿波踊りの企業連の担当者が参加者の練習参加をどの程度求めるかという意識と、練習回数や演舞構成の実施との関連を見ていく。阿波踊りの企業連54社中12社 (22.2%) は「練習必須」だとしているが (表4)、各社の練習回数は1~25回と幅がある。「できれば参加してほしい」と答えた企業は37社 (68.5%) で、練習回数は1~47回である。「練習なしでも本番出られればよい」と答えたのは11社 (20.4%) で、練習回数は0~10回と比較的少ない。単純に練習回数が多いほど練習参加に対する姿勢が厳しいとは言い切れないようである。

演舞構成を行う企業連15社中5社は「練習必須」と回答したが、複数回答を行っているものも含めて11社が「できれば参加してほしい」もしくは「練習なしでも本番出られればよい」と回答している。これらの企業は練習回数が多いという傾向があるものの、練習参加が必須かどうかは企業によって異なる。

また、企業連54社中28社 (51.9%) は事前の練習に一切参加していない飛び入り参加者^{注14)}を受け入れている。演舞構成を行う15社中5社には練習で演舞全体を仕上げながら練習なしの飛び入り参加者も受け入れている様子が確認される。

練習に対する意識の回答が重複していた6社のうち、2社は演舞構成を行い、5社は飛び入り参加者を受け入れているが、6社とも「練習なしでも本番出られればよい」と回答している。これらの企業では参加者ごとの役割に応じて求められる練習量が異なると推察される。

三原やっさ踊りの企業チーム担当者が参加者に求める練習参加の姿勢は寛容で、参加者の「練習が必須」と答える企業は皆無である (表4)。当日の飛び入り参加者を受け入れる企業は8社 (57.1%) である。

表4 参加者の練習参加に対する企業連 / チーム担当者の意識

		練習参加 必須	できれば練習に 参加してほしい	練習に出られなくても 本番出られればよい	当日飛び入り 参加者の有無
阿波踊り	連数	12 (11)	37 (31)	11 (5)	28
	比率 (%)	22.2	68.5	20.4	51.9
三原やっさ踊り	チーム数	0	10 (9)	5 (4)	8
	比率 (%)	0	71.4	35.7	57.1

企業連 / チームの運営に関する質問紙調査 (2019, 2021) の結果より

※阿波踊りの企業連では6社、三原やっさ踊りの企業チームでは1社の回答が重複していたため、() 内は回答が重複していた企業を除いた数

ここまでの比較の結果、阿波踊りの企業連の方が参加者の範囲は企業・地域内外に広がっており、練習回数・時間は多いことが確認される。中でも演舞構成を行う企業ほど練習量が多い。参加者に求める練習参加の姿勢も企業連の方に強く表れていたが、演舞構成の有無との関連は見られなかった。演舞構成の実施により練習回数が増える傾向は確認されるが、それによって練習参加が強く求められるわけではなく、1つの企業内でも参加者ごとに求められる練習量が異なっている場合もある。そこで、電話による聞き取り調査の結果を基に演舞構成の有無と練習内容の関係をより具体的に見ていく。

3-3. 阿波踊りの企業連の具体的な活動事例

阿波踊りの企業連の本番までのプロセス (参加者の募集方法や練習、本番時の参加の仕方) について、電話での聞き取り調査の結果を表5に示す。ここでは演舞構成と定期的な練習の有無、参加者の練習参加を必須とするか否かという3点で、それぞれ異なる組み合わせを有する5つの事例を取り上げる。

表5 企業連の本番までのプロセスについての聞き取り調査の結果（抜粋）

企業 No.	質問		
	(1) どのような人が参加されていますか？	(2) どのような練習をされていますか？	(3) 本番はどのように参加されるのでしょうか？ 演舞構成などは行いますか？
A	全国規模で参加したい人を募ります。ただし、オーディション（一般レベルの確認審査）をやりませぬ。7月にね。受かったものだけが8月に徳島の本番で踊ることができるんですよ。	徳島、大阪、東京の三地点で練習を行います。3月に募集して、大阪と東京は4月から練習開始。徳島はGW明けからです。大阪と東京は隔週で担当者か高円寺の有名連が指導に行きます。（徳島の）練習の指導は有名連にお願いしています。1988年、先代の会長が企業連を始めた時に「伝統文化の継承を目的に真面目にやりたい、お金を払って見てもらうのだからそれなりのものを見せたい」と有名連に指導を依頼して、それ以来ずっと関係が続いています。	当日は朝からしっかり練習して、本番をむかえます。初心者も含めて、簡単な演舞構成をしますよ。複雑なものは練習が少ないとお客さんに伝わらないので。（企業連での参加は）地域貢献、メセナだと思っています。阿波踊りの歴史を引き継ぎたいって想いがありますね。最初5年は幹部連中の参加が必須で、お遊びではやらないって姿勢だったんです。
B	社員とその家族・友人、取引先の業者さん、近所の人にもお声がけしています。（大々的な告知は行わず）口コミで。ご近所の方がお子さんを踊らせてたくて参加して、さらにそのお子さんのお友達が参加されて、なんてこともあります。	6月中旬から週2回、1回2時間の練習です。18時半～20時半まで、先に帰られる方や遅れて参加される方もいますよ。工場内で練習するんで、参加者名簿を作って、（外部の）参加者が構内に入れるようにしています。指導は自分たちでやっています。	演舞構成もやっています。初心者でも練習に出られていれば（演舞構成に参加）できますよ。練習に来られなくて当日参加になってしまう人は、基本の振りですすだけになります。習熟度に合わせてこちらは対応できます。
C	8割社員、あとの2割は関連会社の人とかですね。取引先のお客さんも数名参加します。	6月末から週2で（練習を）やりませぬ。勤務が交代制なんで、参加者は隔週くらい参加率になりますね。鳴り物も自分たちで持っています。指導はツテで、有名連とかに所属して指導ができる人をお願いしています。	指導と本番は一般連にお願いしています。今年で2年目で鳴り物と踊り手の参加をお願いしていますね。一般連は目立たないように基本の前進のみです。それでもテレビに映るので踊りはしっかりやるべきだと考えています。
D	社員とその家族、友人にお客様ですね。社員を中心とした身内、という感じですね。地域のイベントに参加させていただいているので、社員だけではなく、参加したい人には門戸を開いています。昨年は100名、今年は165名でした。	7月に入ってから合計4回です。有名連から鳴り物と指導者が来てくれます。社内で練習しますよ。参加者のうち、県内の方は（練習に）来ませぬ。	有名連の踊り手、鳴り物も一緒に出てくれますよ。（企業連は）基本の振りですすだけなんです。他県の参加者は（練習に来られないので）ぶっつけ本番になりますね。
E	全国の支社が声掛けをした、取引先のお客さんが参加します。従業員は一切踊りませぬ。	練習は当日のみです。（当日の午後に行われる）選抜阿波おどりを見て、ホテルに移動して、そこで着替えて食事をとって。ちょっと練習してから栈敷に踊り込みませぬ。	始めた当初から、一般連にいろいろお願いしていますよ。うちは37年目なんですけど、お客さんに徳島に来てもらおうついでに、企業見学もしてもらってるんですよ。うちについてよく知ってもらおうきっかけになるんでね。
F	社員とその家族です。	7月中旬から週1で。長年参加している人はある程度踊れるので、新人向けの練習です。普段の指導は（社内の）経験者がやっていますよ。1、2回は有名連も指導に来てくれます。練習の時はCDですな。	有名連とは13年（の付き合い）です。うちの社員の後ろに鳴り物、その後ろに踊り手がついてきてくれます。私たちが退場した後に、有名連だけで演舞を披露してくれているみたいです。私たちが（演舞）構成はしませぬよ。
G	徳島県内の加盟店の経営者や従業員、あとは近隣の社員も参加します。	6・7月は週2回で、全部で10回くらいかな。徳島支店か（公共の）体育館を使います。指導は有名連にお願いしているんですけど、始めたばかりなのでどっこって決まっています。昨年は〇〇連、今年は△△連にお願いしました。	踊る日にちによって都合がつく有名連を紹介してもらっているんですよ。一緒に踊ってくれる有名連が指導にも来てくれます。普段の練習はCDを使いますね。本番は踊り手の方も鳴り物の方も一緒に出演してくれますよ。
H	社員、ご家族、お客様、他支社で60～100名ほどです。	2回です。有名連が指導してくれます。（練習には）鳴り物も来てくれますね。社内で練習しています。	当日は有名連の演舞もあります。企業体としては地域貢献を行いたいという気持ちはあるのですが、押しつけがましくならないように、何を行うかという選択は難しいですね。阿波踊りはコンテンツが非常に明確で、誰もが喜ぶ分かりやすいツールです。

企業連の運営に関する聞き取り調査（2019）の結果より一部抜粋、（ ）内は筆者による補足

① A社の事例（演舞構成有、定期練習有、練習参加必須）

演舞構成があり、参加者に対して練習参加を必須とするA社企業連は、飛び入り参加者を受け入れていない。参加者は社内の全国規模で募っている。東京・大阪では4月から、徳島では5月上旬から練習が開始され、週1～2回、1回90分の練習を3、4か月継続する。A社は練習の指導を有名連にも委託しており、設立当初から「伝統文化の継承を目的に真面目にやりたい、お金を払って見てもらうのだからそれなりのものを見せたい」という方針で活動を続けている。そのため、7月のオーディション（一般レベルの確認審査）

で一定の基準に達していないものは本番では踊ることができない。初心者も含めて簡単な演舞構成を行っており、経験に関わらず連全体で見せることを意識した練習を積み重ねていることが分かる。

② B社の事例（演舞構成有、定期練習有、練習参加自由・飛び入り可）

演舞構成を行いながらも練習参加を必須としていないB社企業連は、当日まで練習なしの飛び入り参加者も受け入れている。参加者の範囲は県内外の従業員、その家族や友人、取引先業者や近隣住民などと多岐に渡っており、近隣住民への声掛けは口コミである。練習は6月上旬から週2回、1回2時間で、練習・演舞構成の指導、生伴奏を担当する鳴り物は従業員が担う。参加者は演舞構成を行う群と行わない群に分かれており、初心者であっても練習に参加できれば演舞構成に加わることができる。練習に来られない人は演舞構成無しの群で単純に前進しながら踊るだけとなり、「参加者の習熟度に合わせて対応」している。

③ C社の事例（演舞構成無、定期練習有、練習参加必須・飛び入り可）

C社企業連は演舞構成無しで練習参加を必須としているが、飛び入り参加者も受け入れている。参加者は8割が自社従業員、2割は関連企業の従業員や取引先顧客である。6月末から週2回、1回60分の練習が行われ、指導は有名連に所属している踊り手に任せている。自社従業員に鳴り物を担う者はいるが、人数が少ないため一般連と協働して演舞場に出演している。有料演舞場で踊ると「テレビに映るので踊りはしっかりやるべき」と述べており、有料演舞場での踊りが練習のモチベーションにつながっていることが分かる。

④ D社の事例（演舞構成無、定期練習有、練習参加自由・飛び入り可）

演舞構成無しで練習参加を必須としないD社企業連は、飛び入り参加者も受け入れている。参加者は県内外の従業員、その家族や友人、顧客である。「地域のイベントに参加させていただいているので、社員だけではなく、参加したい人には門戸を開いています」と言う担当者の言葉から、B社と同じく顔の見える範囲での声掛けだと窺える。練習は7月から合計4回、1回2時間行い、「他県からの参加者はぶっつけ本番」で、全員が練習に参加することは最初から想定されていない。鳴り物は持っておらず、練習の指導と本番時の出演を有名連に依頼しており、有名連の協力ありきで参加が成り立っていることが分かる。

⑤ E社の事例（演舞構成無、定期練習無）

演舞構成は行わず、練習も当日しか行わないと答えたE社企業連は、関係企業の接待に阿波踊りを活用している。自社従業員はサポートに徹し、踊るのは県外から来る取引先の顧客である。そのため練習は当日のみ、本番前の夕食会場で15分ほど行われるだけで、踊りの指導と鳴り物、本番時の出演を一般連に依頼している。当日は舞台で行われる「選抜阿波おどり」を観覧した後、ホテルで着替えと食事を済ませ、演舞場に踊り込む。同時に企業見学も行うことによって、自社への理解を深めてもらう機会にしている。

以上より、企業連はそれぞれの状況（参加目的や参加者の範囲、指導者・熟練の踊り手・鳴り物の有無等）に合わせて運営されており、連ごとに多様な活動を展開していることが分かる。A社の事例のように事前の練習を前提とする連もあれば、B社の事例のように練習量の異なる参加者の共存が可能な連もある。

また、他連との協働関係も阿波踊りの企業連の特徴と言える。三原やっさ踊りの企業チームではチーム間での協力関係は見られなかった。企業連ではC社、D社、E社の事例のように（演舞構成や鳴り物、踊りの指導などを担う、芸能への参与度の高い）熱心な参加者が連内に存在しない場合、外部への委託で補っていることが分かる。

3-4. 企業連の多様な活動実態を支える要因

企業連のこのように多様な活動実態はどのような要因によって可能となっているのだろうか。両踊りの相違点である演舞構成と3-1で前述した祭りの開催形態に着目して考察していく。

演舞構成を行う、もしくは行わないという選択に着目して企業連の多様な活動実態を見ていくと、隊列という概念が浮かび上がってくる。両踊りはともに行列行進型の踊りでありながら、阿波踊りには同じ役割を担当する集団ごとの隊列という概念がある。演舞構成を行いつつ飛び入り参加者を受け入れるという、一見すると相反する現象が可能になっているのは、この隊列と役割分担があるためである（図1）。さらに他連との協働出演の際にもさまざまな組み合わせ（企業連の後に有名連が続く場合や有名連を前後に分けてその中に企業連を配置する場合など）が可能になっており、隊列を生み出す行列行進型という舞踊特性が企業連に様々な選択肢を提供していると考えられる。

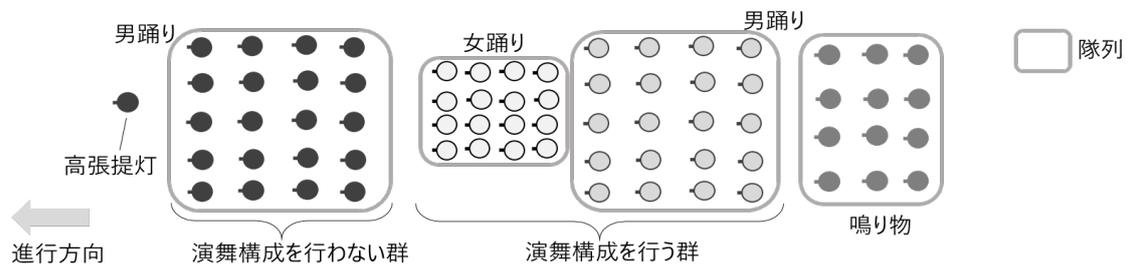


図1 企業連の隊列構成の一例

阿波おどりでは観客が入場料を払って観覧する有料演舞場が複数あるが、三原やっさ祭りでは有料の観覧席はない。有料演舞場で踊ることで自分たちの踊りの価値を自覚し、「見せる」踊りを目指そうという意識が芽生える。この意識が3-3で確認されたA社やC社の事例のような演舞構成の実施や練習への意欲につながっていると考えられる。練習が足りず自分たちの踊りで「見せる」ことができない場合、協働出演する連の習熟した踊りに頼っていることも窺える（表5のF、H社）。自分たちで「見せる」選択肢もあれば他者に任せるといった選択肢もあり、それぞれの状況に応じて選ぶことが可能になっている。有料演舞場で見られるということが応用的な演舞構成の実施や練習量の増加、他連との協働関係につながっていることが分かる。

三原やっさ祭りには踊り審査がある。一般的に評価の場は競争を誘発し、練習量の増加につながると考えられるが、三原やっさ踊りの企業チームでは練習量が少なく、参加者の練習参加も強く求められているわけではない。構成上の発展がない三原やっさ踊りでは、阿波踊りのように群舞を揃える練習の必要がなく、審査も揃った群舞を評価するわけではない。よって、審査があることは企業チームの活動実態に影響を及ぼしていないと考えられる。

また、阿波踊りでは鳴り物という生伴奏が連ごとに必須である。三原やっさ踊りでは会場全体で統一音源を用いるため、チームごとの演奏者は必須ではない。阿波踊りでは鳴り物を持たない連の参加が難しくなると考えられるが、実際にはそのような連は鳴り物を持つ地元の連と協働出演することで補っている（中村まい 2019：58）。この背景には委託できる地元の連が多数存在すること、踊りや音楽を担い手全体で共有していることなどがある。地域で共有されてきた民俗芸能ゆえに可能となる協働関係によって、企業連の多様な活動は支えられているのである。

一方で、三原やっさ踊りに演舞構成が見られないのはなぜなのか、考えられる理由を考察しておきたい。川内（2007）は1999年に「みたか連」がフォーメーションを導入したことを報告しているが、その後、演舞構成は定着しなかった。その理由として、三原やっさ踊りでは個人の自由奔放な踊りが尊重されているこ

とが挙げられる。阿波踊りがもともとそうであったように、チームでの統一された群舞より個人がどう踊るかということが重視されているのであろう。有料演舞場がなかったため、見られる意識の拡大も起こらなかったと推察される。会場の地理的な制約も考えられる。三原やっさ踊りでは道路を二分割して往路・復路に使用しており、チーム内で横幅をとって踊ることが難しい。

統一音源が用いられるようになったのも、この地理的制約に起因している。生伴奏だと往路・復路で行き交う他チームの生音によって自チームの音が聴き取りづらいという状況が生じていたからである。チームごとの演奏者が必須ではないことやチーム単位で審査が行われること、見せるための演出が必要ないなどの理由で他団体との協働関係が発展しなかったと考えられる。

以上のように舞踊特性と祭りの開催形態の相違点に着目して企業の活動実態を検討したところ、阿波踊りの企業連の多様な活動実態を可能にしている要因として、隊列を生み出す行列行進型という舞踊特性と有料演舞場の存在、民俗芸能ゆえに成り立つ協働関係が挙げられる。

踊りを核とした祭りでは、大勢の踊り手の存在が見応えにつながり、観客を集める一因となる。阿波おどりで観光化を図った節目では踊り手を獲得する諸策が講じられてきており（関口 2007）、企業は踊り手を集めることによって戦後の阿波おどりの発展に貢献したと言われている（中村久子 1994：2-5）。本研究の結果から、企業連は企業・地域内外の参加者を練習量に関わらず受け入れることができ、一部では熱心な担い手の育成にも貢献していることが明らかになった。企業連は現在でも担い手として祭りの発展に寄与していると結論付けられる。

4. まとめ

本研究では阿波踊りの企業連の活動実態を明らかにし、三原やっさ踊りの企業チームとの比較によって企業連の特徴を示すことを目的として調査結果の整理と考察を行った。その結果、企業連の参加者の範囲は企業・地域内外に広がっており、練習への取り組み度合いや練習参加を求める姿勢、本番へのプロセスが多様であることが確認された。このような多様な参与形態を可能にしている要因として、阿波踊りに特有な隊列を生み出す行列行進型という舞踊特性や有料演舞場の存在、民俗芸能ゆえに成り立つ協働関係が注目された。地域や芸能への参与・習熟度を問わず、多様な参加者の参加を可能にしているという点に特徴があり、企業連は阿波踊りを支える重要な担い手として祭りの発展に貢献していると考えられる。

本研究を通して、効率的な集客を前提とした運営体制において見過ごされがちな企業連の活動実態が明らかになり、その活動を支える要因として舞踊・祭りの特性を指摘することができた。近年、社会構造の変化に伴い、他の芸能においても担い手としての企業の役割が注目されている^{注15)}。背景でも触れたように、観光資源化に伴う祭りの大規模化において、担い手を如何に排除せず運営していくかが肝要になってくる中、本研究のように企業の活動実態を示すことは今後の民俗芸能の発展や祭りの変革について議論していく上で意義があると考えられる。

今後は他種の連の実態を明らかにし、担い手たちの関係性や参与による恩恵の実際を明らかにしていくことで、阿波踊りが市民に与える影響についての議論をさらに進めることができると考えている。

謝辞

本研究は多くの企業の皆様と、阿波踊り・三原やっさ踊り関係者の皆様のご協力によって成り立っております。この場を借りて御礼申し上げます。また、論文執筆にあたり長きにわたってご指導いただいております。

ます福本まあや先生と、的確かつ明解なコメントでご指導いただきました査読者・編集者の皆様にも感謝申し上げます。

注

- 注1) 踊りそのものを指す場合は「阿波踊り」、祭りを指す場合は「阿波おどり」の表記を用いる。
- 注2) 阿波踊りは動きが単純で素人でも取り組みやすい一方、踊りを洗練させていくには長い年月が必要とされており、習練を積んで「見せる」踊りを披露する踊り集団が全国各地に多数存在している。
- 注3) 2017年に累積赤字4億3600万円が発覚し、それまで運営を担ってきた徳島市観光協会の破産手続きが行われた。翌年の阿波おどりでは徳島市と徳島新聞社等の経済団体で構成された実行委員会が運営を主導したが、赤字解決のための方策が一部の担い手側の意向と異なっていたため混乱が生じた。
- 注4) 2018年の反省を踏まえ、2019年以降はキョードー東京共同事業体に運営が委託されたが、2020年阿波おどりの中止を発端に徳島市が共同事業体との契約を解除、2022年には新実行委員会が発足した。
- 注5) 地域伝統芸能等を活用した行事の実施による観光及び特定地域商工業の振興に関する法律。
- 注6) 民俗芸能を対象に扱う民俗芸能研究自体が、戦前の観光資源の発見という文脈から始まったものであると指摘されている（橋本2014）。民俗芸能が無形民俗文化財などに登録されることで、文化財や観光資源としての新たな社会的意味づけがなされていると言われており（俵木2006：146）、その称号を得るために保存会が発足される事例も生じている（橋本2016：125-126）。
- 注7) 阿波踊りの踊り集団は「連」と呼ばれ、有名連とは阿波おどり振興協会と徳島県阿波踊り協会に所属する33連（2019年時点）を指す。観光施設や「選抜阿波おどり」などでの舞台演舞を引き受けている。
- 注8) 本研究では踊り方や隊列の形、進行方向、リズムパターンなどに変化を加えたものを演舞構成と呼ぶ。
- 注9) 他にも有名連や一般連などを対象にした研究として、阿波踊りの舞踊動作や演舞構成に関する先行研究がある（中村久子1990；小林2017）。
- 注10) 全338連の中から株式会社、有限会社、官公庁、医療法人等の従業員やその家族、友人・知人らが参加する114連を抽出し、さらにそこから非営利の要素が考えられる組織（官公庁、病院などの医療法人など）を除外して、78社を対象とした。
- 注11) 質問紙は郵送法で対象企業に配布・回収した。質問項目は2019年度における参加者の内訳、練習内容、他の連との関わり、運営体制など全20項目で、回答は企業連担当者に依頼した。調査は筆者が所属する機関の倫理審査委員会の承認を得ている（承認番号：2019-62）。
- 注12) 企業の選択基準と調査方法は阿波踊りと同様である。調査は2021年に行ったが、2020年、2021年ともにコロナ禍で祭りが中止となったため、2019年の参加状況を振り返って回答してもらった。筆者が所属する機関の倫理審査委員会の承認を得ている（承認番号：2021-114）。
- 注13) リズムパターンや進行方向に変化をつけるもので、熟練者は空いた空間へと自由に移動していく（参考：三原やっさ祭り振興協議会／三原やっさ祭り実行委員会「三原やっさ踊りの特徴」）。
- 注14) 本番の参加は決まっているものの事前の練習参加が見込めない者を指す。仕事の都合や居住地が遠方であるため練習に参加できなかった者、企業幹部が当日接待で招く顧客や取引先などが想定される。
- 注15) 例えば大石（2006：51-55）は盛岡さんさ踊りを事例に、芸能の伝承母体は従来の「地域社会」から「職場社会」になっていると指摘し、府中（2017）は青森のねぶた祭などにおいて企業が資金・人材面で祭りの継続に寄っていると報告している。

文献

- 1) 足立重和, 2015, 「郡上おどりの継承を考える」, 『追手門学院大学社会学部紀要』, 9: 141-153.

- 2) 阿波おどり事業運営体制等検討委員会, 2021, 『阿波おどり事業運営体制等検討委員会報告書』.
- 3) 府中裕紀, 2017, 「地方経済の変化と都市祝祭の存立基盤」, 松原宏編, 『知識と文化の経済地理学』, 古今書院:東京, 204-218.
- 4) 橋本裕之, 2014, 『舞台の上の文化——まつり・民俗芸能・博物館』, 追手門学院大学出版会:大阪.
- 5) 橋本裕之, 2016, 「無形民俗文化財の社会性:現代日本における民俗芸能の場所」, 『追手門学院大学地域創造学部紀要』, 1:121-131.
- 6) 俵木悟, 2006, 「身体と社会の結節点としての民俗芸能」, 『日本民俗学』, 247:140-168.
- 7) 俵木悟, 2018, 『文化財/文化遺産としての民俗芸能 無形文化遺産時代の研究と保護』, 勉誠出版:東京.
- 8) 川内由子, 2007, 「「阿波踊り」と「三原やっさ踊り」の相関性・相違性:踊る側からのアプローチ」, 『表現文化研究』, 6(2):141-153.
- 9) 川内由子, 2017, 「「四国大学連」にみる阿波踊りの伝承における学生連の役割」, 『徳島地域文化研究』, 15:21-28.
- 10) 小林敦子, 2017, 「「阿波踊り」の統一的集団舞踊への変容」, 『比較舞踊研究』, 23:1-11.
- 11) 三原市教育委員会, 2014, 『三原名物やっさ踊り』, 三原市教育委員会文化課:広島.
- 12) 三原やっさ祭り振興協議会/三原やっさ祭り実行委員会, 「三原やっさ祭り」, <https://www.yassanet/index.html>, (参照 2022.7.1)
- 13) 三好昭一郎, 1998, 『阿波踊史研究』, 徳島県教育印刷:徳島.
- 14) 中村久子, 1990, 「阿波踊りにおける多様性について (1)」, 『徳島大学総合科学部 健康科学紀要』, 3:1-18.
- 15) 中村久子, 1994, 「新聞記事に見る戦後の阿波踊り—戦後の阿波踊りを支えたもの—」, 『徳島大学総合科学 人間科学研究』, 1:1-11.
- 16) 中村久子, 1995, 「阿波踊りの動きの多様化とその要因—その1—」, 『舞踊学』, 17:68-69.
- 17) 中村久子, 1996, 「阿波踊り起源説について」『徳島大学総合科学部人間科学研究』, 4:23-36.
- 18) 中村まい, 2019, 「徳島市の阿波踊りに参加する企業連の特性:企業連の実態と参加者の意識に着目して」, 『舞踊学』, 42:56-63.
- 19) 日本放送協会編, 1973, 『日本民謡大観 (四国篇)』, 日本放送出版協会:東京.
- 20) 大石泰夫, 2006, 「「盛岡さんさ踊り」考—イベント祭りと民俗芸能」, 『日本文学会誌』, 18:34-57.
- 21) 大森恵子, 1992, 『念仏芸能と御霊信仰』, 名著出版:大阪.
- 22) 関口寛, 2007, 「昭和初期・徳島における観光産業振興と阿波踊り」, 『凌濤』, 14:1-23.
- 23) 高橋晋一, 2000, 「「連」のエスノグラフィー:阿波踊りの文化人類学的研究に向けて」, 『徳島大学総合科学部人間社会文化研究』, 7:27-42.
- 24) 高橋晋一, 2015, 「阿波踊りの観光化と「企業連」の誕生」, 『国立歴史民俗博物館研究報告』, 193:221-237.